インゼミ活動報告書　　インゼミ委員　　鎌田　研人

①インゼミまでの道程　　序章

何の因果かインゼミ委員に任命されてしまい僕の苦難のインゼミ人生が始まりました。

僕は関学の担当だったのですが、インゼミといえばまずはテーマ設定ですが今回はここから難航しました。というのは、我々は自分なりにいろいろテーマを考えていったのですが、関学側が他のインゼミとの兼ね合いで京大側に対して既にテーマを提示しており、これでないとできないと主張したからです。

今回のテーマは日米貿易摩擦でその中で絞ってフィルム、半導体、自動車の３分野についてのディベートでした。正直いってこのころは僕があまり勉強しておらず、テーマ設定は結構いい加減でした。このころ僕がした事といえば、「ｗｈｏ's　ｂｕｓｈｉｎｇ　ｗｈｏｍ」（著者ローラ＝タイソン）を読んでいただけでした。

このいい加減な僕の態度があとになってすごく響いてくるなどとはこの頃の僕は夢想だにしていませんでした。

②インゼミまでの道程　　第２章

しかし夏休みがおわってそろそろ勉強をしはじめると色々最初には見えてなかった問題点が見えてきました。それはまず、半導体のことでした。半導体協定がこの年の８月に締結されたのですが、新聞各紙が「論争点無き交渉」といったように確かに現在の半導体市場にはそれほどの問題はなく、論争のポイントが見つからないのでした。

もう少し詳しくいうと、米国が主張する数値目標２０％は既に日本市場では達成されており、今回はそれの念押しといった交渉であったのです。また半導体といっても色々種類があることが分かり半導体担当の下村君にも迷惑を掛けてしまいました。

③インゼミまでの道程　　第３章

また関学との話し合いが進むに連れ、関学のめざしている、ディベートと京大の目指しているディベートに関する考えの違いが見えてきました。端的に言えば京大が、勉強のためのディベートをめざしているのに対し関学はディベートのためのディベートをめざしていたということです。それが顕著にあらわれたのはレジュメ交換に対する意見の食い違いでした。我々は内容のある議論になるようにあらかじめある程度の内容をあわせていこうとしてレジュメ交換をしようとしたのですが、関学はほとんど内容を提示せず、ここで色々問題が生じたのです。これは色々話し合いをしたのですが、関学の「ディベートとは、その場での当意即妙のやりとりが大事なのであり資料にあまりこだわるのは枝葉末節である。ゆえにレジュメ交換はしたくない。」という主張を覆すことができず、我々だけ手の内をばらしたままで当日を迎えました。

④インゼミ当日　　第４章

色々紆余曲折はありましたが、いよいよ当日を迎えました。場所は京都会館の会議室でしたが、当日僕は３９度の高熱をだしてしまい脂汗をかきながら進行するという情けないことになってしまいました。順番はフィルム、半導体、自動車になりました。

さていよいよ開始になったのですが、まずフィルム分野でいきなり敗退しました。これは熱があろうが無かろうが関係ないほどの完敗で、明らかに勉強量、ディベートのテクニック、論理的思考力のすべてにおいて関学は我々を上回っていました。

また半導体分野も下村、川村コンビの奮闘はあったのですが相手の術中にはまり、敗北してしまいました。そうして残された自動車分野にはみんなの期待がかかりました。

しかしやはりゼミ長、加地はやってくれました。巧みな弁舌で関学側を翻弄この日唯一の勝ち星をあげてくれました。このようにしてインゼミはとりあえず終了しました…。

⑤インゼミの反省点

こうして今年のインゼミは京大側の一勝二敗で敗北におわりました。まず敗因を分析してみると、ひとつは向こうのペースでほとんどの物事が進んでしまったことがあると思います。これはひとえに僕の押しの弱さゆえだと思います。また２つめとしては、インゼミに対する考え方の違いだと思います。関学はディベーとに勝つことが至上命題のようですが僕は負けたことはそれほど気にしていません。しかしこれはぼく個人の見解であってこの辺はゼミ自体でコンセンサスをとるべきかもしれないです。来年はこの辺に関して何のためのディベートをするのか考えた方がいいと思います。

３つめはやはり勉強量の絶対量の違いだと思います。関学は３分野に関して８月には既に模擬ディベートをこなしており、ほかにも同じようなテーマで何本かのディベートをこなしておりディベートに関する知識なども豊富でした。

⑥最後に…

インゼミを通じて感じたことはこういう連帯作業があったほうがゼミの連帯感は強くなるのではと思いました。というのは、岩本ゼミはどちらかというと個人主義のような感じが強く、あまりゼミという単位で動くという意識が希薄です。しかしこのような共同作業をすることによりある程度ゼミ間に親近感がわくのではないでしょうか。

そういう理由で僕はインゼミをしてよかったと思うしこれからも続けていってほしいと思います。本当に最後になりましたが、忙しいなかわざわざ見学にきていただいた岩本先生、柴田さん、鬼の議長を努めていただいた高橋さん、審判を務めていただいた中西さん山本さん、その他お世話になった谷口さんやその他４回生の方に感謝しつつ筆を置きたいと思います。